

教養コース 文学講座

定員50人

小林一茶に学ぶ — 俳句の作り方、味わい方(全5回)

第2回 青年期の名句をまねる

第3回 壮年期の名句をまねる

## 第2回 青年期の名句をまねる

日 時 令和5年9月10日(日) 10:00~12:00  
場 所 みずほ台コミュニティセンタ  
参加者 22名

### 講座の要約

第二回目のお話を要約すると以下のようなものである。

先週は一茶の解説と並行して、感じたことを「俳句らしきもの」として短冊に書いてもらった。それを一覧したので配付する。その前置きとして正岡子規の「吾健にして十のみかんをくひつくす」を取り上げたコラム「筆洗」(東京新聞/9月4日)を転記した。理由は満三十五歳で亡くなる子規が、その少し前に〈自分は元気である〉と、少し無理のある自己診断をしているから。詩歌は〈哀しみを哀しみのまま書いても、読者に届かない〉ことがわかる。前回に解説した一茶の「我と来て遊べや親のない雀」にも、子規の「十のみかん」と同じく、〈哀しみを



こらえた背伸び)があったことを思い出したい。

先週回収した皆さんの俳句への挑戦は〈十七拍にまとめた人〉〈五文字ほどのつぶやきに終わった人〉とさまざまだが、私は言葉にできただけで大成功だと思う。その上で、一茶や子規のように、少し無理をする意思があれば、きっと共鳴する読者を得られる。その座、仲間で定期的集まる会席があれば、それはかなうと信じている。江戸時代の昔から、俳句は文学などとやかましいものでなく、庶民が集まって遊ぶ文化だったから。俳句は生々しい現実を〈言葉によって、明るく、軽く〉受け入れる〈身体によい文化〉なのだ。

次に教材に沿って「季節と人生について」に移る。江戸時代初期の資料から季節のことば(季題・季語)を少し抜き出したので参考にしてほしい。つまり、まずは季節を示すことばが人生と同じく〈移ろうもの〉であることを学びたい。人生を丁寧に生きるためにはそれで十分であって、慌てて俳句歳時記などを買う必要はない。暮らしに辞書をおいて、季感を感じとればよい。その際、陰暦から陽暦に変わった明治以降の季感は約四十日余りずれていることは覚えておきたい。一例をあげれば、陰暦で新年の前後にあった立春が、陽暦では二月の五日ころにあたるという知識である。



次に「青年期の名句をまねる」に移る。一茶は二歳で母を亡くし、継母との折り合い悪く、祖母が亡くなってほどなく江戸に奉公に出た(詳細未詳)。その傍ら、葛飾派の俳諧師に学んで、師匠没後はその後継となる。これは奉公やめること、俳諧を職業にすることを意味した。そのころの作に「象潟や島がくれゆく刈穂船」があるが、「象潟」は芭蕉が『おくのほそ道』で目指した歌枕の一つ。俳諧師になる通過儀礼として芭蕉行脚の跡を辿った時代だが、一茶が本当に旅をして得られた句かどうかは不明。皆さんが〈一茶の句を踏まえて俳句に挑戦した〉のと同じく想像の産物であったかもしれない。「山寺や雪の底なる鐘の声」も『おくのほそ道』行脚の産物でないことは自明。山形の山寺を「雪の底」と形容するには無理があるので。

以下、「壮年期の名句をまねる」にも少し触れて本日の結びとする。この時代は三十歳から六年半の西国行脚へ出かけて、俳壇における地位を高めようとしたころだが、教材に示した「〔1〕子どもになりてみたきかな」にはまことに正直な思いがこもる。皆さんはどんなときに〈子どもに戻ってみたいなあ〉と思うだろうか。〈恥ずかしい〉とか、〈今さら望んでも仕方ない〉という分別が働いてしまいがちだが、空欄〔1〕に入る一茶の思いは「正月の」であって、まことに素直な感慨を詠んでいる。「〔2〕草の庵（いほり）も漏りはじめ」の〔2〕には「季節と人生について」で解説した「御降り（おさがり）や」という正月三が日のめでたい雨が。世間でめでたいとする雨が一茶の草庵にとっては〈雨漏りにすぎない〉と苦笑する心に、〈病気をこらえて受け入れる〉子規の寛容に似たものがある。子規や一茶を真似て、身辺、境遇を十七拍に置きかえ、自分の人生を客観化する楽しみを持っていただきたいとお願いして、第二回めの講座を終了する。

## 第3回 壮年期の名句をまねる

日時 令和5年9月17日(日) 10:00~12:00

場所 みずほ台コミュニティセンター

講師 谷地快一先生 東洋大学名誉教授

参加者 28名

### 内容

第一回に続いて、第三回目も一茶の俳句鑑賞を刺激に十七拍の自己表現に挑戦して下さいということで切り短冊が配られた。その後の話を要約すると以下のようである。

俳句は寛容（咎めないこと、受け入れること）を知った人の詩である。それは老年になって始めるのにふさわしい文芸ということ。中学・高校生に〈人生の悟りや、諦め〉を求めるのはむずかしい。スロー・ライフ、つまり丁寧に暮らすことができる年齢にある皆さんにこそ俳句は向いている。一茶の生涯と作品に共鳴し、俳句作りに挑戦することで、皆さん各自の人生を承認する楽しみをおぼえていただきたい。



本日の話は、教材として配付した資料を使って、一茶が俳諧師として実力を養うため



に、三十歳から六年半も西国を旅した壮年期の作品を解説。それを抄出する。

「寝転んで蝶とまらせる外湯かな」は旅の途中で、露天風呂に身体を伸ばしす作者に蝶が来てとまる。作者のくつろぎの気分を蝶がやさしく支えている。

「秋の夜や旅の男の針仕事」について。一茶の旅は僧侶の托鉢同様に、旅費に乏しいものなので、着物の繕いも自分でする。「秋の夜」が利いて、なんとも侘しい自画像だが、愚痴になっていない点がよい。

「義仲寺へいそぎ候初時雨」の「義仲寺」は木曾義仲の墓所。芭蕉は初冬に亡くなるが、その際に義仲の墓の傍に葬ってくれと遺言した。時期は初冬、芭蕉が愛した時雨が通り過ぎる十月で、その忌日を時雨忌といい、毎年、彼を慕う俳人たちが諸国から集まった。一茶も芭蕉を供養し、追悼句を手向けるために急いだのである。文学史の一面を教えられる句である。

ところで、一茶が三十九歳のとき、信州の父が亡くなった。『父の終焉日記』に最期は念仏を唱えるしかなかったという俳文（句文）がある。その文章は教材に拠ってもらうが、結びの発句は「寝姿の蠅追ふもけふがかぎりかな」というもので、その絶望を冷静に詠み上げて、心にしみる句である。

「夕桜家ある人はとくかえる」は都会に一人で暮らす一茶の悲痛な思いを描いた句。花見に出掛けても、家庭のある人々は日暮れ時には帰路に就く。一人残される淋しさを淡泊に詠んでいる点が腕前で、読者は切なくなる。

和歌の美学は京都（平安朝文化）をもとに作られている。一茶はそうした和歌伝統とは無縁のままに生きた。彼が教養と無関係な人々に愛される理由のひとつは、その等身大の作風にあるのだろう。

そして、最後に聴講者が作った俳句を回収して終了した。

